

『成瀬は都を駆け抜ける』 宮島未奈 新潮社

デビュー作ながら本屋大賞を始めとして数々のランキングを総ナメにした『成瀬は天下を取りにいく』は3部作で、<成瀬>シリーズはこの作品で堂々完結となります。

「わたしはこれから坪井と京都を極めたいと思っている」。晴れて京大理学部に（近いから）入学した成瀬の一年間が描かれます。舞台は滋賀から京都へと移り、成瀬の周りに集まってくれるのは、個性的な人ばかり。京大と言えば、森見登美彦ということで、森見臭ぶんぶんの「達磨研究会」なんてサークルが出てきたりもします。でもやっぱり圧倒的に個性的なのは成瀬で、自転車に乗ったことがなかった、麻雀で引きがめちゃくちゃ強い、おみくじで大吉しか引いたことがない、「好きな食べものって何?」と聞かれて白いご飯だと答えるなど、今作でも成瀬っぷりが炸裂しています。また今作では、そんな成瀬も母親に支えられてきたのだとわかるエピソードがあり、ホロリとさせます。「最高の主人公」のことがますます好きになる完結篇です。

『失われた貌』 櫻田智也 新潮社

去年のミステリはこれだ!「このミス」、週刊文春、「ミステリ!」とミステリ・ランキング3冠!これがいかにもミステリだという王道の大傑作なのです!

山奥で、顔を潰され、歯を抜かれ、手首から先を切り落とされた死体が発見された。不審者の目撃情報があるにもかかわらず、警察の対応が不十分だという投書がなされた直後、上層部がビリビリしている最中の出来事だった。事件報道後、生活安全課に一人の小学生男子が訪れ、死体は「自分のお父さんかもしれない」と言う。彼の父親は十年前に失踪し、失踪宣告を受けていた。彼は、身元不明の死体が発見されるたびに、同じ確認をしに警察を訪れているという…。

「こういうミステリを待っていた。ついに、来てくれた」(米澤穂信)。「ミステリーが好きで良かったなあ、本当に良かったなあ、と思わずにはいられない」(伊坂幸太郎)。「捜査と謎解きのハイブリッド。すべてのピースがひとつに収まるのが驚異的(恩田陸)。本物の「伏線回収」と「どんでん返し」がここに!

『哲学なんていらない哲学』 あの KADOKAWA

あのちゃんの書いた前代未聞の「あの流哲学書」。バラエティでひっぱりだこで、アイドルと言う枠に捕らわれず、自分のやりたい音楽をやるためにソロになり、紅白にも出場し、武道館公演も成功させたあのちゃん。いまいちばんテレビで自由にやりたいようにやっているように思えますよね。その快進撃の原動力には「復讐」があったそうです。「復讐。これは僕の人生において重要なテーマで復讐なしでは僕ではないし今の僕もいない」。『あなたは周りと違って普通じゃないから、みんなと仲良くして学校にいたいなら、あなた自身が変わる必要がある』そういう学校の先生によく言われた。言ってる意味はわかるけれど、結局僕はそういう言葉や押しつけられる世界をずっと睨んでいた。彼女は見返してやったのです。そして、誰にもなれない「あの」というジャンルを創り出したのです。「ジャンルはいらない。『あの』というジャンルだから。肩書きもいらない。『あの』という肩書きで十分だ。他の人間が死ぬほど頑張っても手にすることができないから」。できることばかりだった女の子が「あの」の完成形になって、次はどこへ向かうのかが楽しみです。この本は、単なるタレントのエッセイ集ではありません。あのちゃんの血がどばどば流れています。「思想」があります。

『しっぽのカルテ』 村山由佳 集英社

本の雑誌「ダ・ヴィンチ」の「BOOK OF THE YEAR 2025」の小説部門で1位に選ばれた『PRIZE』の著者の新作は、感涙の動物病院ストーリー！

信州の美しい木立のなかに佇む「エルザ動物クリニック」。獣医師としては凄腕だけれど、独特の話し方でどこか抜けている院長の北川梓を中心に、女性ばかりのスタッフ3人が力を合わせ、日々運び込まれるペットや野生動物の治療を懸命に続けています。

建築職人の高志は、現場で小さな猫の悲鳴を聞きつけた。母猫はもう冷たくなっていて、他の4匹もダメで、1匹だけがかろうじて息をしていた。クリニックへ連れて行くと、なんとか持ち直した。だが、高志は飼うつもりはないという。飼い猫を死なせてしまい、二度と生きものと関わる資格がないと思っていたのだ。院長は彼に「天国の名前」の話をする。亡くなった犬や猫が、彼らの天国へ行く。そこには門番がいて、台帳みたいなものに記録するために、それぞれ自分の名前を申告しなくてはならない。そのとき、皆が同じような名前を名乗るのだという。<カワイイ>です。<カシコイ>です。高志の場合は<バカダナ>だった…。

『ブーズたち鳥たちわたしたち』 江國香織 角川春樹事務所

極上の澄んだクラムチャウダーを食べるためだけのためにロードアイランド州を訪れた恵理加。目当てのものにありつくことはできたが、給仕してくれたウェイターのルークを異様だと感じる。どこか人を落ち着かせないところがあるのだ。食事が終わった後、レストランの人に話を聞くと、彼は boozes (酒盛りを意味する) と呼ばれる生きもので、日本で言う kappa なのだそうだ。百年以上前にはるばる日本から泳いで移住してきたのだという。ルークの一族は日本に帰ろうと画策していた…。

河童!? なんとこの作品は、江國さん流の妖怪小説なのです。天狗や狐も出てきます。ところが、おどろおどろしいところがいっさいありません。例えば、鳥たちにすごく愛されて、ものすごい数の鳥たちを集めてしまう女性が出てきますが、その女性がそういうのものだとして扱われているように、妖怪たちも日常に自然に紛れ込まれて描かれています。そうなると、彼らもいつもの江國さんの小説の一登場人物となってしまうのです。

『架空の犬と嘘をつく猫』 寺地はるな 中央公論新社

高杉真宙主演で映画化！

「この家にはまともな大人がひとりもいない」。羽猫家の長男である8歳の山吹は困っていた。授業参観日のお知らせのプリントを渡せる人が家族にいないのだ。姉の紅は、もらったその日に教室のごみ箱に捨てたという。「来てくれるわけない」から。姉はそんな家族のことが大嫌いだ。

祖父・正吾はむやみに新しい商売を始めたがる困った癖があって、いまは遊園地を造るのだと夢中になっている。あやしげな店をやっている祖母・澄江はまともな方だが、インドに行ってしまって現在は日本にいない。母・雪乃は、美しい子どもだった4歳の青磁を失って以来、おかしくなってしまった。日曜日、雪乃が目を離したすきに、青磁はひとりで外に出て家から 50m 以上も離れた防火水槽の金網によじ登って水槽に落ち、溺死してしまったのだった。涙を流すこともなく、口を半開きにして虚空を見つめていた雪乃は、葬儀の翌日に倒れ、そのまままるまる2日間眠り続けた。そして、目を覚ました彼女は何事もなかったかのように朝食を作って、「あら、青磁は?」と尋ねるのだった。彼女は青磁の生きている世界に行ってしまった。そして、たまに帰ってくると寝たきりになってしまう。父・淳吾はそんな彼女と直接向き合うことができず、逃げ出した。バーを営む愛人の元に入り浸っている。山吹は母の世界を守るために嘘をつく。青磁が生きているように話を合わせてあげるのだ…。

『終点のあの子』 柚木麻子 文藝春秋

『BUTTER』が、英ダガー賞翻訳小説部門の最終候補、世界的なベストセラーとなり、日本でも野間出版文化賞を受賞した柚木さんのデビュー作が、當真あみ&中島セナW主演で映画化！女子高生の揺れる想いを巧みに描き出しています。

「朱里は、自分はこれでいいと思っている。こうして話している間も、希代子は、恭子さんにダサいと思われやしないだろうかとか、森ちゃんの視線とか、様々なことが気になっているというのに」。高等部から入ってきた朱里は、KYだ。誰かとずっとといっしょにいることがなく、どのグループにも出入りしている。特に美人というわけでもないのに、魅力的だ。お父さんが有名な写真家で、パリにもニューヨークにもいたことがあるという。平気で学校をさぼるし、遅刻もするのに、教科によつては教師の間で一目置かれている。学校をさぼって何をしているか尋ねたら、急行に乗って江ノ島に海を見に行くのだという。「学校をさぼって海に行く — その言葉は美しい音楽とか、宝石の名前のように思われた」。朝、彼女と電車を待ちながら「まじだるい」と言っていたら、朱里はいっしょに急行江ノ島行きに乗ろうと誘つた。私は彼女と電車に乗つたが、降りるべき学校の最寄り駅を過ぎると、自分がどれほど守られ、安心して生活していたかはっきりとわかり、次の駅で降りると告げた。「意気地なし」。朱里ははっきりとそう言った。翌朝、朱里は何事もなかつたかのようにへらへらと話しかけてきた。私の朱里に対する気持ちは、少しだけ曇つた…。

『クスノキの番人』 東野圭吾 実業之日本社

東野作品、初のアニメーション映画化！

不当な理由で職場を解雇され、その腹いせに罪を犯して逮捕されてしまった玲斗は、弁護士費用を支払ってくれた伯母から、その代わりにクスノキの番人をするように命じられる。何のことやらわからないが、玲斗には従うよりほかはなかつた。願い事をすれば叶うという伝説のある月郷神社のクスノキ。その管理人になれというのだが、本当にやってほしいのは夜中の仕事なのだという。満月と新月の夜に「祈念」をしに人々がクスノキを訪れる。祈念の内容は極秘だ。叔母に具体的に何をしているのか聞いても、クスノキの番を続けていればいずれわかる日が来ると教えてはくれない。祈念とは何なのか、願いが叶うとはどういうことか、わからないまま玲斗は番人となる…。

————— 共通テスト、おつかれさま。では、図書館で。